

センター後援事業

シンポジウム「学習方略研究の理論と実践の新しい展開」

報告者 植阪 友理 (学校教育高度化センター 助教)

実施日 2014年3月8日

於 赤門総合研究棟 A200 教室

■開催の趣旨

自立した学習者であるためには、効果的な学習方法（学習方略）を身につけていることが不可欠である。学習方略研究では、効果的な学習方法に結びつく要因の検討や、指導法の検討が盛んに行われてきている。また、近年では心理学的理論を踏まえて、学校現場においてより実践的な研究も行われるようになってきている。科学研究費補助金基盤研究 B「学習方略の自発的利用促進メカニズムの解明と学校教育への展開」（代表 Emmanuel Manalo, 早稲田大学）では、より実践性を高めた理論研究を 2011 年度より 3 年間にわたって行ってきた。本シンポジウムでは、こうした研究から明らかになった最新の研究知見を紹介した。なお、本シンポジウムは、上記の科研基盤 B と東京大学大学院教育学研究科、市川伸一教授主催の研究会、認知カウンセリング研究会との共催で行われた。さらに、東京大学教育学研究科学校教育高度化センターの後援を受けて行われた。年度末の多忙な時期にもかかわらず、70 名の定員がいっぱいになるまで申し込みが見られ、当日は 60 名以上の参加があった。質問も多数なされるなど、非常に盛況であった。

■実施日時と場所

日時は 2014 年 3 月 8 日（土曜日）9 時半から 17 時半にかけて行われた。場所は、赤門総合研究棟 A200 番であった。午前と午後の二つ

のセッションからなっていた。そ以下、それぞれのセッションごとに紹介する。

■午前の内容：最新の心理学的研究知見の紹介

午前のテーマは「最新の心理学的研究知見の紹介」であった。以下のようなプログラムで実施した。

【プログラム】

司会：瀬尾美紀子（日本女子大学）

開会挨拶：市川伸一（東京大学）

1. 学習方略の使用を促すメタ認知的アプローチ 深谷達史（日本学術振興会・法政大学）
2. 学習者の質問方略使用を促す教員養成プログラムの開発 小山義徳（千葉大学）
3. 教師の指導行動が学習者の予習に与える影響—予習方法の指導と授業方略に着目して— 篠ヶ谷圭太（日本大学）
4. 理科授業における教師の教授スタイルが生徒の学習方略使用に与える影響 田中瑛津子（東京大学）
5. 定期テスト場面における方略使用を予測する要因の検討—テスト観と学習動機に着目して— 鈴木雅之（国立情報学研究所）
6. 図表利用方略に関する研究の進展：目的や生徒同士のコミュニケーションによる影響 Emmanuel Manalo（早稲田大学）
7. 学習や問題解決における図の利用とその認

知イメージ 和嶋雄一郎 (東京大学)

これら最新の研究知見について、15分程度のショートプレゼンテーションの形式で発表し、2-3つの発表ごとに15分程度のディスカッションの時間が設けられた。フローも含めて活発な議論が行われた。

■午後の内容：理論とデータを踏まえた実践的研究の紹介

午後のテーマは「理論とデータを踏まえた実践的研究の紹介」であった。以下のようなプログラムで実施された。

【プログラム】

司会：篠ヶ谷圭太 (日本大学)

1. 認知心理学者は日本の学習方略教育にどう関わってきたか 市川伸一 (東京大学)
2. 学習力を育てる中学校教育プログラムの開発—「教訓帰納」と「記憶の精緻化」方略の自発的利用をめざして— 瀬尾美紀子 (日本女子大学)
3. 一斉授業と家庭学習を通じたメタ認知の育成—柏島小学校実践の分析から— 植阪友理 (東京大学)

総合討論

まとめと閉会挨拶

Emmanuel Manalo (早稲田大学)

※終了後に、1時間ほどの情報交換会を実施。

フローには、報告された実践に参加した学校の教員もおり、そうしたメンバーへの質問も含めて活発な議論が展開された。シンポジウム後の感想からは、理論と実践の結びつきを目指した研究に大きな意義を感じている様子が伺われた。来年度の開催についても、好意的な反応が得られた。